

フットパス 各地で広がる

農道や牧場歩き 地域再発見

農道や牧場の道などを散策しやすくして、地域の魅力を知ってもらう「フットパス」づくりが各地で始まっている。大規模な公共工事は不要。今ある道を住民が選んで案内板を立て、地図を作れば観光地に早変わり。いわば日本再発見だ。自然に触れ地域の暮らしを垣間見ることができる旅と注目されている。



コースには案内板があちこちにある—東京都町田市の多摩丘陵フットパス

月曜経済

「国産の牧草を食べさせている酪農があることを知ってもらいたかった」と語るのは、仲間と「根室フットパス」を作った酪農家の伊藤泰通さんだ。伊藤さんたちは私有地の牧場を一部開放した。ここでは飼料の自給率が100%の牛を間近に見ることもできる。

マイペースで

歩き方は自由。丘の上で風を感じながら、2時間ほど1つと座っている人もい

住民が「名所、手作り

る。ルートには廃線跡も組み込まれ、開拓の歴史に触れられる。来訪者はこの10年で8倍になった。フットパスとは歩行者用の小道の意味。英国が発祥の地だ。貴族の広大な土地で生活道路が分断されていたことに不満を抱いた人々が、「歩く権利」を主張し、私有地への通り抜けを求めたのが始まりとされる。日本の道は公道がほとんどなので、「よそ者」を入れることへの理解さえあれば、フットパスは比較的制作しやすい環境といえる。登山やハイキングと違って、目的地を目指すわけではない。好きなペースで好きなだけ、ただただ歩く。

活性化に寄与

最も盛んなのは北海道だ。酪農学園大学の小川巖教授によると、道内には約30市町村、約1000のコースがある。歩けばその土地に愛着を感じるようになり、みみのボイ捨て問題などは聞かない。仲が悪かった近隣の市町村が、フットパスの

ために協力し合うケースもある」といい、地域活性化にも寄与している。東京・新宿から私鉄で約30分。東京のベッドタウンの町田市を中心とした地域に「多摩丘陵フットパス」がある。新興住宅地のすぐ裏山には、ホタルが生息する谷や、新選組が歩いた歴史ある道が残っている。NPO法人「みどりのゆび」の神谷由紀子事務局長は、里山の風景を守り、新旧住民の交流を盛んにするためにフットパスを作った」と話す。全25コース。案内板は市役所から余った資材をもらい、みんなでペンキを塗った。ガイドブックは2万円も売れ、地域の隠れたベストセラーになっている。「フットパスを通じ、いろんな人に会えて楽しいよ」と笑うのは78歳の農業・小林重一さん。地元のおじいさんの素朴な笑顔に会えるのも魅力だ。小林さんは伝統農業の守り手でもある。この地域では、田んぼを借りて農業をやりたいとの申し出が増えている。